

平安京右京一条三坊十三町・

二条三坊十六町跡

2012年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

平安京右京一条三坊十三町・

二条三坊十六町跡

2012年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

歴史都市京都は、平安京建設以来の永く、そして由緒ある歴史を蓄積しており、さらに平安京以前に遡るはるか昔の、貴重な文化財が今なお多く地下に埋もれています。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、昭和 51 年（1976）設立以来、これまでに市内に点在する数多くの遺跡の発掘調査を実施し、地中に埋もれていた京都の過去の姿を多く明らかにしてきました。

これらの調査成果は現地説明会、京都市考古資料館での展示、写真展あるいはホームページを通じて広く公開し、市民の皆様に京都の歴史に対し、関心を深めていただけるよう努めております。

このたび、道路拡幅に伴う平安京跡の発掘調査成果をここに報告いたします。本報告書の内容につきまして御意見、御批評をお聞かせいただけますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当遺跡の調査に際して御協力ならびに御支援いただきました関係各位に厚く感謝し、御礼申し上げます。

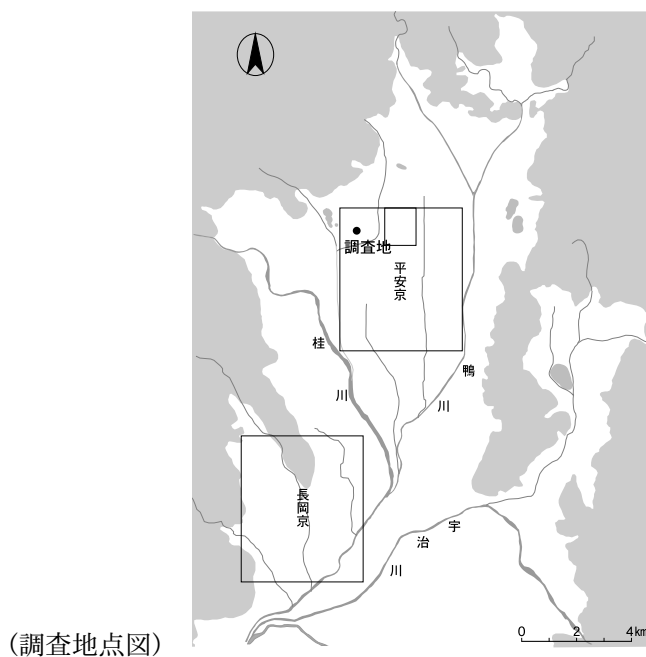
平成 24 年 3 月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 川 上 貢

例 言

- 1 遺 跡 名 平安京右京一条三坊十三町・二条三坊十六町跡
- 2 調査所在地 京都市右京区花園藪ノ下町、花園八ツ口町地内
- 3 委 託 者 京都市 代表者 京都市長 門川大作
- 4 調査期間 2011年10月7日～2011年12月29日
- 5 調査面積 387 m²
- 6 調査担当者 東 洋一・加納敬二
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「花園」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系VI（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 100の位に調査区の番号を振って各調査区ごとに通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
- 12 遺物番号 通し番号を付し、写真番号も同一とした。
- 13 本書作成 東 洋一
- 14 備 考 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、資料業務職員および調査業務職員があたった。



(調査地点図)

目 次

1. 調査経過	1
2. 調査地の位置と環境	3
(1) 遺跡の環境	3
(2) 周辺の調査	3
3. 遺 構	7
(1) 遺構の概要	7
(2) 1 区	8
(3) 2 区	8
(4) 3 区	9
(5) 4 区	10
(6) 5 区	11
(7) 6 区	11
4. 遺 物	12
(1) 遺物の概要	12
(2) 土器類	13
(3) 瓦類	18
(4) 石製品	19
(5) 銭貨	20
5. ま と め	21

図 版 目 次

図版 1	遺構	1 区実測図 (1 : 100)
図版 2	遺構	2 区実測図 (1 : 100)
図版 3	遺構	3 区実測図 (1 : 100)
図版 4	遺構	4 区北トレンチ実測図 (1 : 100)
図版 5	遺構	4 区南トレンチ実測図 (1 : 100)
図版 6	遺構	5 区北トレンチ実測図 (1 : 100)
図版 7	遺構	5 区南トレンチ実測図 (1 : 100)

図版 8	遺構	6 区実測図 (1 : 100)
図版 9	遺構	1 1 区北半全景 (南から) 2 1 区南半全景 (北から)
図版 10	遺構	1 2 区北半全景 (北から) 2 2 区南半全景 (北から)
図版 11	遺構	1 3 区北半全景 (南から) 2 3 区路面 306 (東から) 3 3 区溝 304・305 断面 (西から)
図版 12	遺構	1 4 区北トレンチ北半全景 (北から) 2 4 区北トレンチ南半全景 (北から)
図版 13	遺構	1 4 区南トレンチ全景 (北東から) 2 4 区北トレンチ溝 408 断面 (東から)
図版 14	遺構	1 5 区北トレンチ北半全景 (南から) 2 5 区北トレンチ南半全景 (北から)
図版 15	遺構	1 5 区南トレンチ北半全景 (北から) 2 5 区南トレンチ南半全景 (北から)
図版 16	遺構	1 5 区南トレンチ溝 507・508・509 (北から) 2 5 区南トレンチ溝 509 断面 (南から) 3 5 区南トレンチ溝 507・508・509 断面 (北から)
図版 17	遺構	1 6 区北半全景 (西から) 2 6 区南半全景 (東から)
図版 18	遺物	1 土器類 (内面) 2 土器類 (外面)
図版 19	遺物	1 輸入陶磁器類 (内面) 2 輸入陶磁器類 (外面)

挿 図 目 次

図 1	調査地および周辺の調査位置図 (1 : 2,500)	2
図 2	調査前全景 (南から)	3
図 3	調査風景 (東から)	3
図 4	調査区配置図北半 (1 : 300)	4

図5	調査区配置図南半（1：300）	5
図6	路面306実測図（1：25）	9
図7	土器実測図（1：4）	14
図8	緑釉陰刻文拓影（1：2）	15
図9	軒瓦拓影・実測図（1：4）	19
図10	石製品・錢貨拓影・実測図（1：2）	19
図11	近隣条坊復元図	22

表 目 次

表1	周辺の調査一覧表	2
表2	遺構概要表	7
表3	検出遺構一覧表	8
表4	土器出土比率表	12
表5	遺物概要表	12

平安京右京一条三坊十三町・二条三坊十六町跡

1. 調査経過

今回の調査は、西小路通拡幅工事に伴う調査である。現在の西小路通は平安京の条坊路である恵止利小路の東半部を踏襲し、今回の調査地は右京一条三坊十三町・二条三坊十六町東側に該当する。恵止利小路の幅員の内、西端から中央部までが調査対象地となる。また、この調査対象地には東西方向の条坊路である中御門大路と恵止利小路の交差点を含む。これらのことから、平安京条坊復元の重要な資料となる恵止利小路西側溝・中御門大路南北側溝などの検出が期待された。

平安京右京域は、都市として存続し続けた左京に対し、平安時代中期から衰退が始まり、平安時代後期には都市機能を失い耕地化していたことが、今日までの調査で判明している。恵止利小路は『延喜式』「京程」によれば幅4丈（約12m）としているが、現在の西小路通の道幅は半分以上の約5mとなっている。他方、東西大路である中御門大路は幅10丈（約30m）の規模を誇っていたとするが、現存する道は西小路通を挟んで東は幅3m、西は幅4mと食い違い、狭い東西通路（国有道路敷）になっている。この現象は近接した街区の耕地化に伴い条坊路が浸食された結果と考えられ、街路の変遷過程を解明することも目的として調査を行った。

調査対象地は総延長約135mに及ぶが、東西道路や隣接住宅の生活路を確保する必要から、北から順に1区・2区・3区・4区北トレンチ・4区南トレンチ・5区北トレンチ・5区南トレンチ・6区の8箇所に分断して調査区を設けた。排土置き場を各区内で確保する必要から、4区南トレンチを除き全て反転調査で実施することとなった。恵止利小路の西側溝推定ライン上に位置する調査区は4区南トレンチ、5区、6区の最西端が該当する。また、中御門大路の南側溝が4区北トレンチに推定される。調査は10月7日から開始し、遺構成立面までの現代盛土および近世耕土を重機で掘削した。遺構は全て人力で掘削し、調査区の平面図・壁面図と写真記録を実施し、12月29日に調査を終了した。

調査の結果、恵止利小路西側溝推定位置で平安時代中期に埋没した西側溝を検出し、その溝から調査区東端までの間に巷所化の進展を示すと考えられる近世までの数条の並行する溝を検出した。また、中御門大路との交差点部で、恵止利小路を横断する中御門大路南側溝を推定位置で検出した。その他、交差点中央部で中御門大路の狭隘化を示す2条の東西方向溝や礫敷き路面の残存を検出した。

なお、調査は京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課の指導のもとに実施し、また、調査段階で検証委員の臨検を受けた。

参考文献

辻 純一「条坊制とその復元」『平安京提要』角川書店 1994年

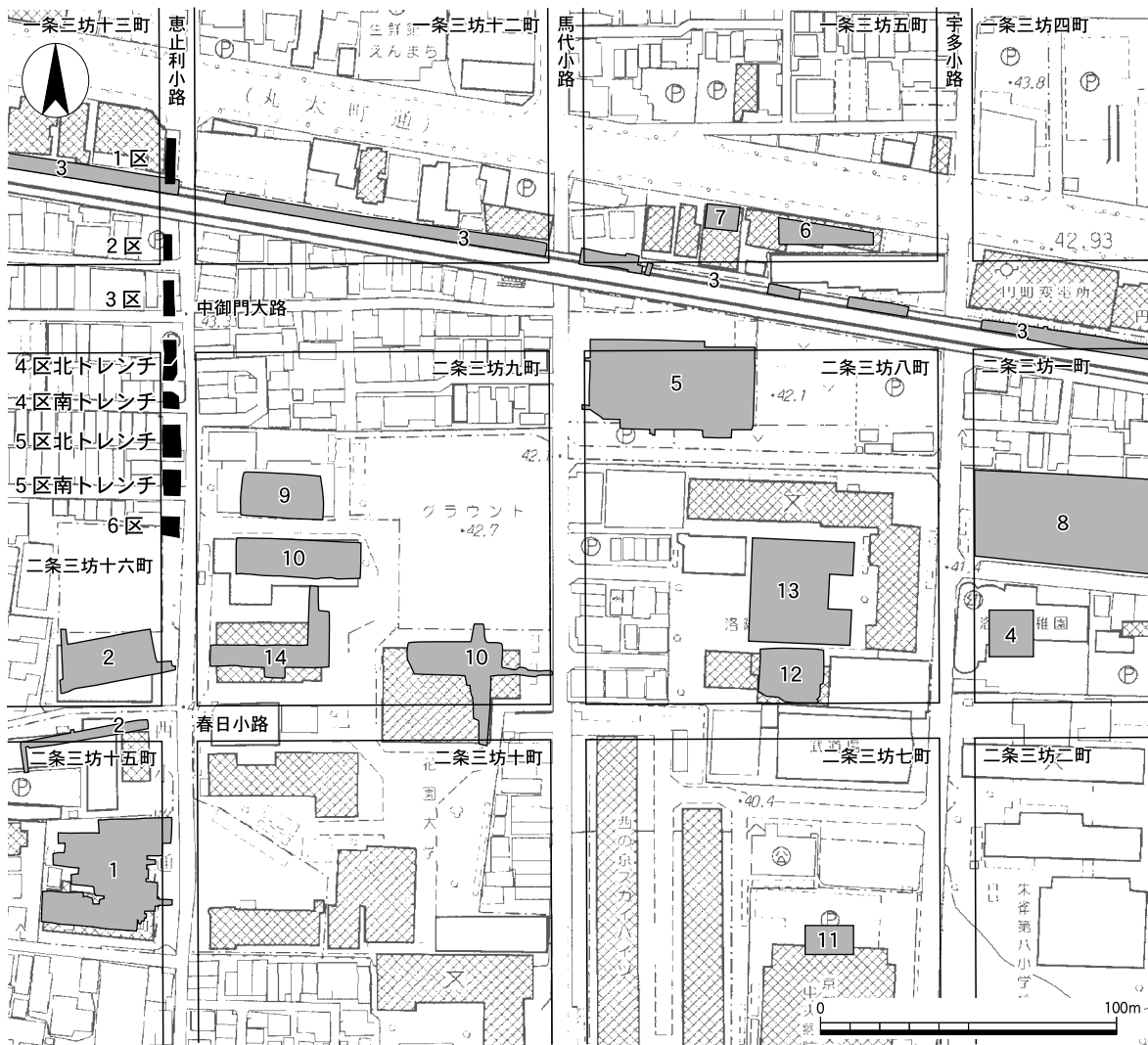


図1 調査地および周辺の調査位置図 (1 : 2,500)

表1 周辺の調査一覧表

No.	遺跡名	調査機関	文献
1	右京二条三坊十五町	(財)京都市埋蔵文化財研究所	『平安京跡発掘調査概報 昭和61年度』京都市文化観光局 1987年
2	右京二条三坊十五・十六町	花園大学考古学研究室	『花園大学構内調査報告V』花園大学 1998年
3	右京一条三坊、二条二・三坊	(財)京都市埋蔵文化財研究所	『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1999年
4	右京二条三坊一町	(財)京都市埋蔵文化財研究所	『平成8年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1998年
5	右京二条三坊八町	花園大学考古学研究室	『花園大学構内調査報告VII』花園大学考古学研究室 2010年
6	右京一条三坊五町	(財)京都市埋蔵文化財研究所	『昭和56年度 京都市埋蔵文化財調査概要(発掘調査編)』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1983年
7	右京一条三坊五町	(財)京都市埋蔵文化財研究所	『昭和57年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1984年
8	右京二条三坊一町	(財)京都市埋蔵文化財研究所	『昭和60年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1988年
9	右京二条三坊九町	花園大学考古学研究室	『花園大学構内調査報告I』花園大学 1984年
10	右京二条三坊九町	花園大学考古学研究室	『花園大学構内調査報告IV』花園大学 1993年
11	右京二条三坊七町	(財)京都市埋蔵文化財研究所	『昭和60年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 1988年
12	右京二条三坊八町	(財)京都市埋蔵文化財研究所	『昭和56年度 京都市埋蔵文化財調査概要(発掘調査編)』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1983年
13	右京二条三坊八町	古代文化調査会	『平安京右京二条三坊八町跡 現地説明会資料』2011年
14	右京二条三坊九町	花園大学考古学研究室	『花園大学構内調査報告VI』花園大学 1998年

2. 調査地の位置と環境

(1) 遺跡の環境 (図1)

調査対象地は、北方から南西方向に流れる天神川・宇多川などによって形成された扇状地で、北が高いなだらかな傾斜地に位置する。また、東方に谷状の凹みがあり西方がやや高い。調査区の地山は黄褐色系の粘土層が大勢を占め砂礫層は部分的に認められただけである。江戸時代の『京都明細大絵図』(18世紀)では、調査地近辺は「畑」もしくは「田畑」と記載されている。西小路通は現在、右京区と中京区の境界となっており、江戸時代は木辻村と西ノ京村の境界であった。

恵止利小路は、『九条家本「延喜式」右京図』に「恵去利小路」と書き入れてあるのが初見で、中世成立の『拾芥抄』「西京図」には「恵止(立)利小路 烏丸 又井戸小路」とある。近世に入っては『山域名勝志』に「恵取ノ小路(烏丸)」とし、『京の水』では「恵立小路(同烏丸をいふ。一名餌耳小路又戸井小路)」と書かれている。明治時代の『京都坊目誌』では「恵土小路又井戸小路(又井戸に作る。東の烏丸小路)」とあり一定していない。水が流れていたことを示す「井」の字をあてていることが興味深く、調査地の八ツ口町は八つの水口があったと伝承されている。

中御門大路は、平安宮西側に開く藻壁門から東に延びる大路で、内裏西側の3門の内、中央の門であることから中御門の名称が生まれたとされている。調査地の藪ノ下町と八ツ口町の境界線である東西道が該当する。その道に沿って1町西に右京区花園中御門町、2町西に右京区太秦安井車道町が存在する。また、2町東にも中京区中御門町が存在する。

(2) 周辺の調査 (図1、表1)

調査地の周辺では平安時代初期から中期の邸宅跡が多く検出されている。

ここでは、調査対象となっている恵止利小路と中御門大路についての既調査を述べる。

恵止利小路は南から北にかけて花園春日町・花園八ツ口町・花園藪ノ下町の3箇所調査されており、3箇所とも西側溝を側溝推定位置で検出している。

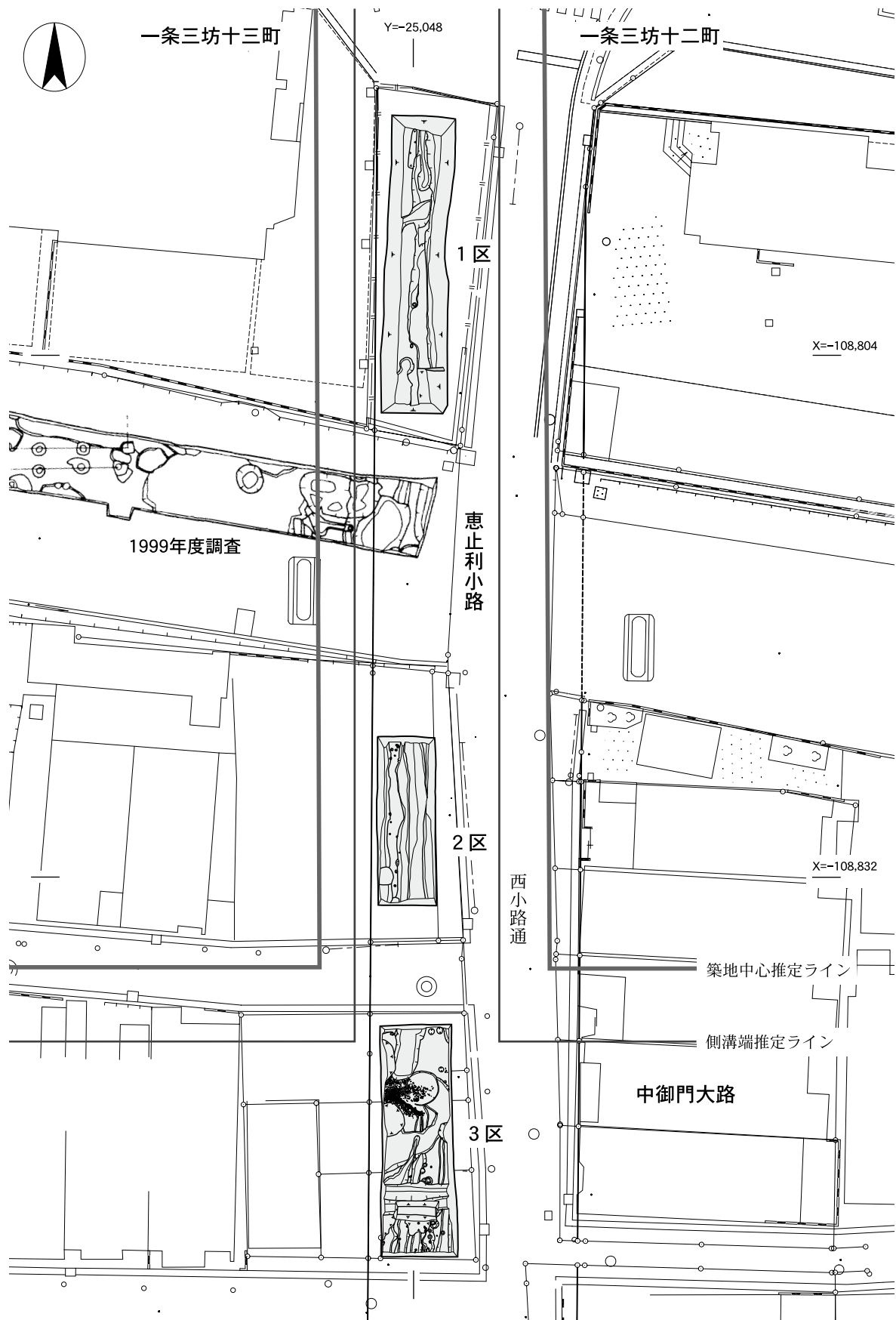
京都市埋蔵文化財研究所が調査した花園大学南で、側溝推定位置とその西に2条の南北溝を検



図2 調査前全景 (南から)



図3 調査風景 (東から)



*京都市建設局道路建設部道路建設課作成の西小路道路計画図に調査区を貼付

図4 調査区配置図北半 (1:300)

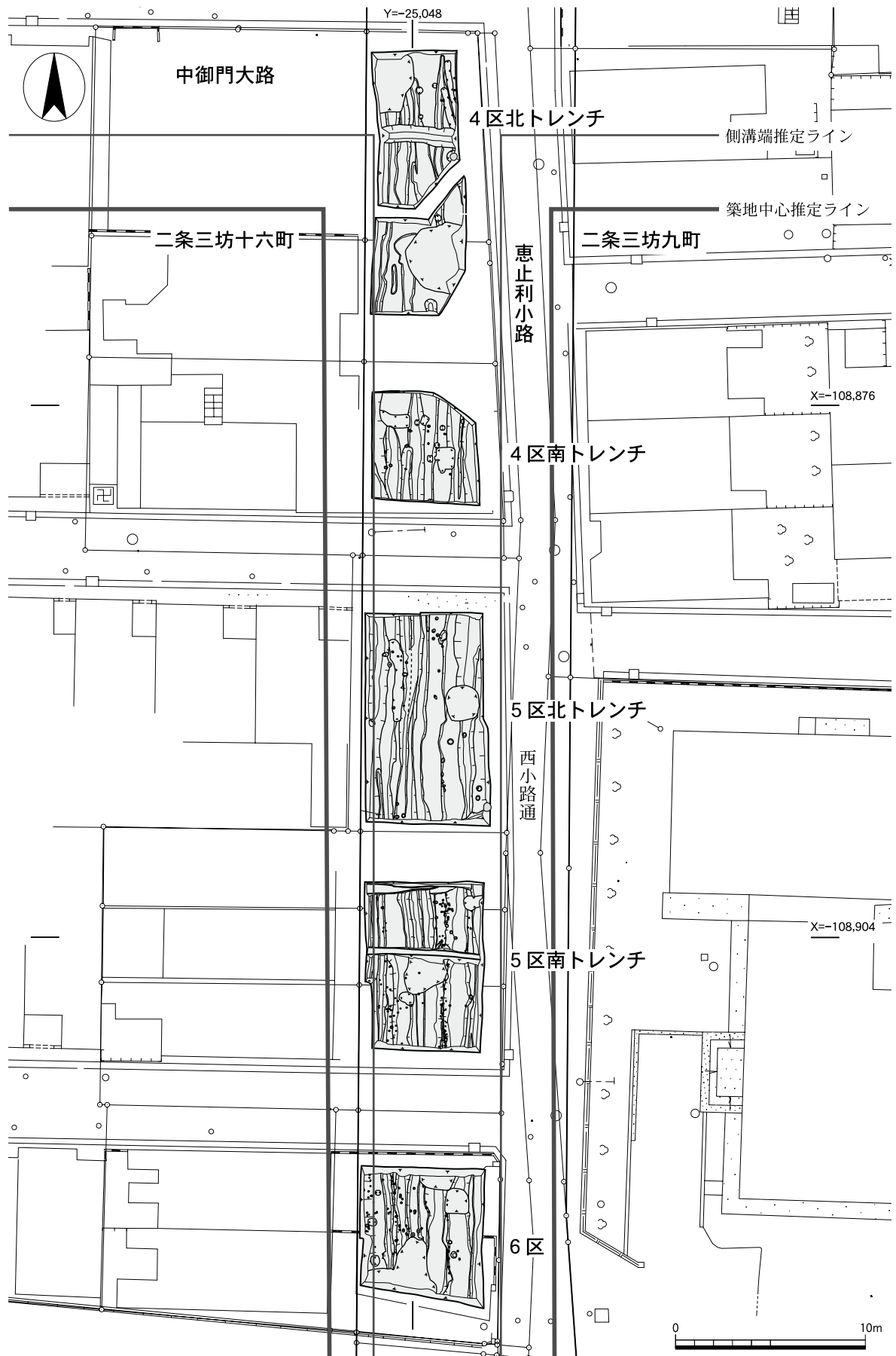


図5 調査区配置図南半 (1 : 300)

出している（調査1）。また、花園大学考古学研究室が実施した花園大学構内調査でも、推定位置とその西に1条の南北溝を検出し、恵止利小路の廃絶期を10世紀の中頃としている（調査2）。さらに、京都市埋蔵文化財研究所が実施したJR山陰線高架に伴う調査では推定位置と西に1条南北溝を検出している（調査3）。

これら調査1～3で調査した検出溝は、全て恵止利小路西側溝であり、東側溝の調査例はない。いずれの調査でも、宅地建物の廃絶期を10世紀代の平安時代中期までに想定している。

中御門大路の調査では、前記JR山陰線高架に伴う調査で北側溝と南側溝を条坊推定位置で検出している（調査3）。花園大学考古学研究所が実施した調査5では、平安京右京二条三坊八町北の中御門大路南側溝を推定位置で新旧2条検出している。溝底の高低差から水は西流して馬代小路東側溝に流れたと考えており、最大幅4m・深さ約0.5mの旧溝が埋まった段階で、新たに11世紀代に廃絶した幅約0.7mの狭い溝が掘られていた。また、宅地内では10世紀末までに遺構が埋没し、条坊の機能が消失したとされている。

3. 遺 構

(1) 遺構の概要

調査区北端から南端までの地表面の高低差は約2 mある。調査区の基本層序は、中御門大路との交差点付近（3区）を除きほぼ同様で、今回検出した遺構は全て自然堆積の地山層を直接掘り込んで成立しており、その上に近世の耕作土層が遺構面上に水平堆積している。この耕作土層によって遺構上面は路面も含め全面が削平を受けている。検出した遺構は主に溝であるが、切り合いと深さの違いによって区別することができる。溝は南方ほど幅が広がり、深くなる。

調査対象地は平安京条坊路内であったことや、耕作に伴う掘削が激しいため、平安時代の遺構は、溝以外は杭跡を除けば皆無である。従って、今回検出した遺構の時期判定は、溝の切り合いと出土遺物によらざるを得なかった。溝は西側の溝が埋まった後、順次東側へ新たな溝を掘削した状態になっている。また、調査区西端で検出した溝の堆積層が黒色であるのに対し、調査区中央部の溝は地山の粘土ブロックで埋め戻したものが多く、流水を示す砂の堆積が部分的にしか見られなかった。

溝の掘形の形状は底が幅広いU字形を呈し、残存幅1 m前後、残存深さ0.4 m前後の溝が多い。しかし、恵止利小路中央に該当する調査区東部の溝は他の溝より深く幅も広い。主に灰色砂礫層が堆積しており、この溝は洪水などによって埋まった可能性が高い。

中御門大路交差点に該当する3区は、やや凹凸のある黄褐色粘土の地山直上に砂層と砂礫が覆っていた。また、3区南の4区北トレンチからは恵止利小路の側溝を検出していない。このことから3区南半から4区北トレンチにかけては遺構面がかなり削平されている可能性がある。ただし、凹部の一部に小礫を敷いた路面残存面と考えられる路面306を検出している。

なお、遺構番号については、混乱を避けるため100の位に各調査区の番号を付している。例えば、2区で検出した遺構は溝201、3区で検出した遺構は溝301となる。また、表1遺構概要に記した遺構検出幅・深さは遺構検出面での残存値である。

表2 遺構概要表

時 代	遺 構					
	1区	2区	3区	4区	5区	6区
平安時代 (9～10世紀)			路面306	溝407	溝507・509	溝607
平安時代 (11世紀)				溝408	溝508	溝608
平安時代 (12世紀)以降	溝101～103、 土坑104	溝201～204	溝301・303～ 305、土坑302	溝401～406	溝501～506・ 510	溝601～606・ 610

表3 検出遺構一覧表

遺構	幅 (m)	深さ (m)	遺構	幅 (m)	深さ (m)	遺構	幅 (m)	深さ (m)
溝101	0.2~0.8	0.2~0.5	溝401	0.6	0.4~0.5	溝507	0.5~1.1	0.2~0.4
溝102	0.4~1.0	0.2	溝402	0.6~0.8	0.2	溝508	0.2~0.5	0.4
溝103	0.5~1.2	0.4	溝403	0.5~1.0	0.2	溝509	0.3	0.3
土坑104	0.5~0.8	0.3~0.5	溝404	0.5~0.9	0.2~0.3	溝510	0.6	0.3
溝201	0.2~1.0	0.3~0.4	溝405	0.5~0.7	0.2	溝601	0.3~0.5	0.2~0.4
溝202	0.7~1.0	0.3~0.4	溝406	0.7~0.9	0.3	溝602	0.8~1.4	0.3
溝203	0.3~0.7	0.2~0.4	溝407	0.3~0.9	0.1~0.3	溝603	0.8~1.2	0.2
溝204	0.3~0.6	0.3~0.4	溝408	0.8~1.0	0.5	溝604	0.4~0.6	0.2
溝301	0.3	0.3	溝501	0.5~1.4	0.3~0.5	溝605	0.6	0.3
土坑302	1.2~1.5	0.4~0.6	溝502	0.6~1.5	0.2~0.4	溝606	0.7	0.3~0.5
溝303	0.3	0.2	溝503	0.6~1.0	0.2~0.4	溝607	1.0	0.4
溝304	0.7~0.8	0.2~0.3	溝504	0.4~0.9	0.2~0.4	溝608	0.4~0.6	0.3
溝305	0.6~0.9	0.3~0.4	溝505	0.4~0.6	0.3	溝610	1.2	0.3
路面306	—	—	溝506	0.7~1.2	0.3~0.4			

(2) 1区 (図版1・9)

1区は近世以降の2層の耕土層直下が遺構検出面である。

溝101～103 調査区東側で、砂礫層で埋まった2条の南北方向の溝101と溝102の西肩を検出した。東端で検出した溝101は溝102より0.3m深く、溝102の上から掘り込んでいる。溝102の検出幅は北が狭く南で0.2m深くなり、幅も0.5m広がる。溝101の幅は調査区外となるので不明である。また、溝101と溝102の底から南西方向の粗砂で埋まった幅1.2m、深さ0.4mの溝103を検出しており、取水口の可能性がある。

土坑104 調査区南西で、細長の砂泥で埋まった深さ0.5mの土坑104を検出したが、性格は不明である。

(3) 2区 (図版2・10)

遺構検出面直上に近世の耕作土層が堆積しており、その下層で近世から中世の4条の南北溝を検出した。

溝201～204 2区の溝201・202は1区の延長線上に位置する。また、1・2区間の既調査であるJR高架下調査(調査3)では2条の南北方向の溝(SD1・3)を検出しており、1区の溝101・溝102と繋がるものと思われる。溝202に東肩を掘られている深さ0.4mの溝203は、北が狭く南に広がる。底には砂礫層が堆積していた。深さ0.4mの溝204は、底に細砂や泥砂層が堆積するが、その上は地山の黄褐色粘土ブロックによって人為的に埋められた様相を呈している。溝202と溝204から中世の遺物が出土しているので、中世以降に埋まった溝であると考えられる。

(4) 3区 (図版3・11)

3区は中御門大路交差点北半に該当する。地山面が高い北西隅部を除き、ほぼ全面に近世以降の粗砂や砂礫が覆う。また、近世以降の耕作溝などを南部で検出したがいずれも浅い。

調査区北東部の平坦な地山面直上に0.3m堆積していた第9層は、流水性の砂礫であり洪水層の可能性が高い。2区で検出した溝202の延長線上に堆積し、溝202から中御門大路に流出した可能性がある。

溝301 北東隅と南部東壁で検出した。溝301西肩部は2区の溝201の延長となる。

土坑302 北壁中央で検出した幅1.5m、深さ0.6mの土坑302は、第9層を掘り込んで成立しており、北壁より南2.8mで急激に立ち上がる。埋土も砂礫層がないことから土坑とした。上層から近世の染付が出土している。

溝303 深さ0.2mの東西方向の溝303は、土坑302によって東延長部が直角に切られている。

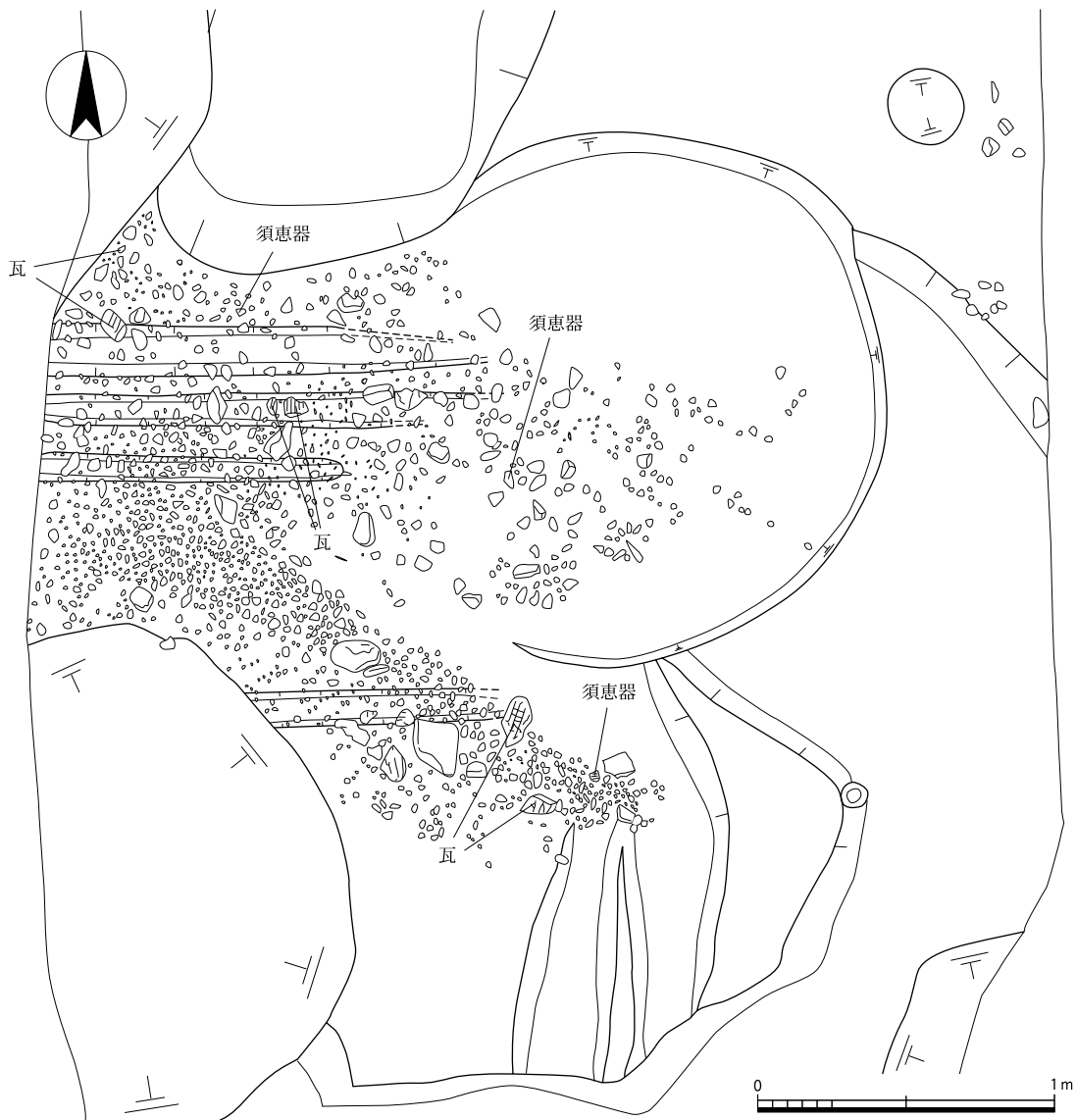


図6 路面306実測図(1:25)

また、北肩が調査区外となるので幅も不明である。中御門大路北側溝推定ライン付近なので北側溝の可能性はある。黒褐色砂泥の単一土で埋まり、遺物は出土していない。

溝 304・305 (図版 11- 3) 調査区南半の中御門大路北側推定ラインより 9m 南、現代の街区(藪ノ下町南端)より北 5m で、東西に横断する溝を 2 条重複して検出した。ただし、南側の溝直上に下水管が貫通しており、下水管保護の必要から東西壁を断ち割って断面調査した。南側の溝 304 は、幅 0.7 m、深さ 0.3 m である。北の溝 305 は、溝 304 によって南肩を切られているが、残存幅 0.6 m、深さ 0.4 m である。粗砂や砂礫で埋まっていた。溝底はいずれも東が高く、西流していたものと思われる。溝直上には近世から近代の砂礫層が堆積する。出土遺物から近世以降に埋まったものと考えられる。

路面 306 (図 6、図版 11- 2) 調査区中央東部の凹みから、地山の黄褐色粘土直上で 1～2 cm の礫を敷いた路面 306 を検出した。北東部に大きな肥溜があり途切れているが、礫敷きの中には瓦や須恵器を小片に割ったものを含んでいた。また、礫敷きには東西方向に並行する幅 0.1～0.2 m、深さ 2 cm 程度の 4 条の凹みがあり、轍の可能性はある。

(5) 4 区 (図版 4・5・12・13)

4 区北トレンチは、地山は黄褐色粘土と黄橙色砂礫であり、地山直上に近世の耕土が堆積している。また、浅い南北溝を検出しているが、全て近世の耕作溝である。4 区北トレンチの中御門大路南側溝推定ラインで東西方向の溝 408 を検出した。

4 区南トレンチでは 7 条の南北溝を検出した。調査区の南北を貫通する溝は、東から順に溝 401・402・403・404・407 で、南半から溝 405 と溝 406 が派生する。これらの溝は 5 区以南で検出した溝より浅い。

溝 408 (図版 13- 2) 中御門大路の南側溝推定ライン上で幅 1 m・深さ 0.5 m の恵止利小路を横断する溝 408 を検出した。最下層に褐色粗砂が堆積していたので流水があったものと考えられる。底の標高は西端と東端でほとんど変化がなく、流水の方向は不明である。この溝から 11 世紀から 12 世紀にかけての土師器皿が出土したので、平安時代末期以降に埋まったものと考えられる。なお、この溝の検出点より北 5 m 地点が現在街区(八ノ口町)の北端となる。

溝 401～407 調査地東側では砂泥・砂礫で埋まった深さ約 0.5 m の溝 401 が存在するが、幅は調査区東壁以东となるため不明である。その西に深さ 0.2 m の砂礫が堆積する溝 402 がある。これらの溝の西に幅 0.5 m の平坦部が残存している。上部は耕作の削平を受けているが、恵止利小路路面部となる部分である。また、路面部の西側では溝 403 から溝 407 を検出しており、西から順に掘削されている。西端の溝 407 は、南端で残存深 0.3 m であるが、北端では残存深 0.1 m しかなく、溝 405 と溝 406 も途中で消滅している。このことから 4 区南トレンチ北部から 3 区にかけて、恵止利小路西側溝は削平を受けて消滅した可能性が高い。また、最西端の溝 407 は恵止利小路西側溝推定ライン上に位置し、砂礫層の上に黒褐色砂泥が堆積していた。この堆積関係は 6 区南端まで続き変化がない。

(6) 5区 (図版6・7・14・15)

5区は4区南トレンチから成立する溝群の南延長であるが、5区北トレンチ南部西端付近から新たに深くて細い溝508が発生し、5区南トレンチから溝509と溝510が派生する。これらの溝は南側ほど広くなり、重複幅が広がる傾向がある。

また、5区では溝による掘り込みを受けていない路面部を2箇所検出した。しかし、5区南トレンチでは5区北トレンチに残存した東部の路面部は、溝が広がることによって幅が極端に狭くなっており、西部の路面部は幅が広がった溝によって消滅している。

溝501～507 (図版16) 4区の溝401と溝402の延長が幅を広げて南下している。5区北トレンチの溝501は中央部が一段深くなっており、東肩が上がる。深さは0.5mで、薄い泥土層の上に砂礫層が堆積していた。また、溝501に切られた砂礫が堆積する溝502は、深さ0.4mである。

5区北トレンチでは、溝502の西に恵止利小路路面部が幅約1m残存する。路面上面は耕作土によって削平されており、地山の黄褐色粘土が露出して平坦になっている。その西に幅約1m、深さ約0.4mの溝503が掘られている。埋土は砂泥が主体である。さらに西に深さ0.2～0.4mの溝504と深さ0.3mの溝505が重複して存在する。溝504は東の溝503に東肩が切られている。これらの溝の埋土は、地山の黄色粘土を多く含むことから、東側の溝を掘った土で埋め戻した可能性がある。溝505も同じように溝504の東肩を切っている。溝505の西から再び最大幅0.5mの路面部が残存するが、細く北部と南端では溝505と西側に掘られた幅0.7～1.2m、深さ0.3～0.4mの溝506によって削平されている。溝506も粘土ブロックを含んだ粘質土で埋まっていた。最西端部の深さ0.2～0.4mの溝507は、幅が調査区外となり不明である。

溝508 (図版16) 溝506の下層西側に新たに幅0.2～0.5m・深さ0.4mの溝508が成立する。溝508は溝507を切って成立しており、溝506より古く、溝507より新しい。出土遺物より11世紀半ば以降に破棄された可能性がある。

溝509・510 (図版16) 5区南トレンチから新たに溝506と溝508の間に、深さ0.3mの溝510が成立する。また、最西端で西肩が調査区外となる幅0.5～1.1m、深さ0.2～0.4mの溝507の底から、さらに古い溝509を検出した。溝509は溝507底をさらに0.3m掘り下げており、本来は0.6m以上の深さであったと想定できる。幅は調査区外となるため不明である。

(7) 6区 (図版8・17)

6区で検出した溝は、全て5区で検出した溝の南延長である。

溝601～608・610 路面部は拡幅した溝によって消滅している。溝607の幅は西壁外で、東肩部が溝608によって掘り込まれているため幅が不明であるが、推定できる深さが0.4m以上、幅が1m以上あり、底が平坦である。溝底の砂礫層の上に暗褐色泥土が堆積していた。幅0.4～0.6m、幅0.3mの溝608は、西側溝推定位置より約1m東にそれてくる。

4. 遺物

(1) 遺物の概要

出土した遺物は、平安時代前期から中期までの土器類・瓦がほとんどである（表4）。最も出土比率が高い須恵器に平安時代前期・中期の食器類が3%ほど含まれている。国産施釉陶器である緑釉・灰釉陶器の出土比率も多く、土師器の比率と同じになっているのが特徴である。越州窯系青磁・蛇の目高台の白磁碗などの輸入陶磁器も出土している。また、須恵器円面硯や緑釉陶器瓶の取っ手なども出土していることから、当時の周辺住人の社会的地位を示すものと考えられる。しかし、これらの遺物は全て小片で、実測可能な製品は少ない。また、東側の砂礫の埋土溝からは鎌倉時代と考える常滑甕・龍泉窯系青磁などが出土した。出土遺物の量は微量であるが、遺構の切り合い関係に対応して、東の溝ほど新しい。平安時代中期までの遺物に混じるが、量は微少である。また、石帯の生産を示す石切鋸の痕跡がある石材が1点、銭貨は北宋の祥符通寶（初鋳1009年）が1点出土している。木器類は残りにくい環境であるために1点も出土していない。

表4 土器出土比率表

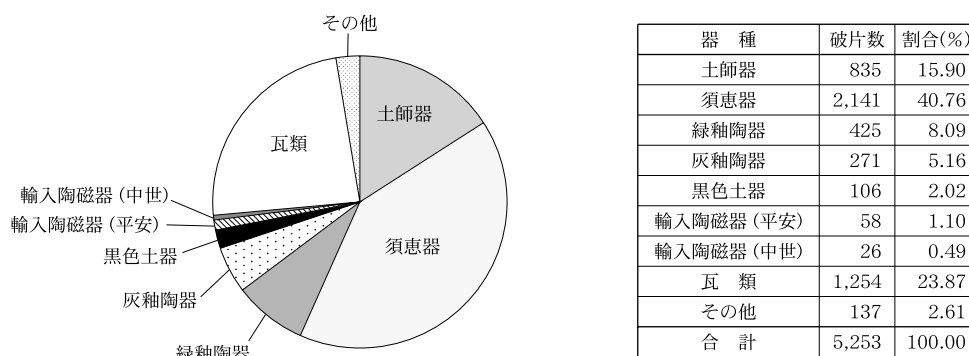


表5 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
平安時代 (9～10世紀)	土師器、黒色土器、須恵器、 緑釉陶器、灰釉陶器、輸入 陶磁器、瓦類、石製品		土師器7点、黒色土器1点、須 恵器3点、緑釉陶器18点、灰釉 陶器11点、輸入陶磁器8点、瓦 類5点、石製品1点		
平安時代 (11世紀)	土師器		土師器3点		
平安時代 (12世紀)以降	土師器、瓦器、須恵器、焼 締陶器、施釉陶器、輸入陶 磁器、瓦類、銭貨		須恵器1点、輸入陶磁器5点、 銭貨1点		
合計		45箱	64点(3箱)	37箱	5箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、遺物をランク分けしたため、出土時より8箱多くなっている。

(2) 土器類 (図7・8、図版18・19)

土師器 (1～10)

1～3は溝509から出土した土師器皿小片である。器厚が薄く口縁が「て」の字状である。口径13～14cm、器高約2.5cmである。10世紀半ば(Ⅲ期古)の土師器皿であろう。

4は溝608から出土した土師器皿で、口縁部を二段ナデで作るが、端部はまだ立ち上がりず、やや外に開く。口径15cm、器高2.4cmである。11世紀前半(Ⅳ期古～中)の土師器皿であろう。

5・6は4区北中御門大路南側溝となる溝408上層より出土した土師器皿である。5は「て」の字状の端部であるが、厚手で器高の低い土師器皿であろう。小片のため口径・器高共に不明であるが、11世紀後半(Ⅳ期新)を想定している。6も小片であり確定しがたいが、同時期を想定している。

7は溝507下層砂礫層から出土した土師器甕である。口径13.2cm、口縁上端部が平らで、口縁部を肩部で横ナデによって接合した痕跡が残る。胴部に指押さえの跡がかすかに残る。胎土は白色の砂粒を含むが微量である。10世紀代(Ⅲ期中)の河内産甕であろう。

8は溝402から出土した。口径15.2cmの土師器甕である。7より器厚があり体部外面に指押さえの痕跡がある。10世紀前半の河内産の甕であろう。

9は溝509から出土した土師器甕である。口縁部上端を平らに作るが、7より外側に傾斜を持っている。胎土は粘質で砂をほとんど含まない。胴部外面に指押さえの痕跡がある。胴部外面に煤が付着している。10世紀代(Ⅲ期)で河内産に比定できる。

10は7と同じ溝507の下層砂礫層から出土した土師器羽釜である。分厚い鏝部を横ナデで貼り付けている。胴部外面に縦方向のハケメを施す。内面および口縁部・鏝部は横ナデで調整している。胎土は荒く白色の砂粒が多い。口径は24.8cmで、器壁が厚い。10世紀半ば(Ⅲ期中)の摂津産である。

緑釉陶器 (11～28)

11は5区北トレンチの遺構検出中に出土した陰刻花文緑釉陶器皿である。磨滅を受けているため細部の調整は不明であるが、輪高台で高台内面まで釉を施している。胎土は白灰色で、釉は淡黄緑である。焼成はやや甘い。猿投窯で9世紀半ば(Ⅱ期古)の製品であろう。

12は3区遺構検出中に出土した陰刻花文緑釉陶器碗である。両面に釉が掛かる。胎土・釉とも11に似るが、陰刻がやや稚拙である。9世紀後半(Ⅱ期中)の東海系製品であろう。

13は溝506から出土した全面施釉の緑釉陶器碗である。体部外面に沈線で模様を描く(図8)。貼り付け高台で、重ね焼きの際の接触面積を少なくするために高台底部が二段に分かれ、高台外面が内面に比べ高い。高台内面にも釉が付着するが、糸切り痕は見当たらないのでナデ消しによるものと思われる。器表に篋ミガキの痕跡はない。内面底部に2条の沈線があり内面底が平坦である。須恵質である。釉は黄緑色で、剥離が著しい。近江産の緑釉で10世紀前半(Ⅱ期新～Ⅲ期古)に比定できる。

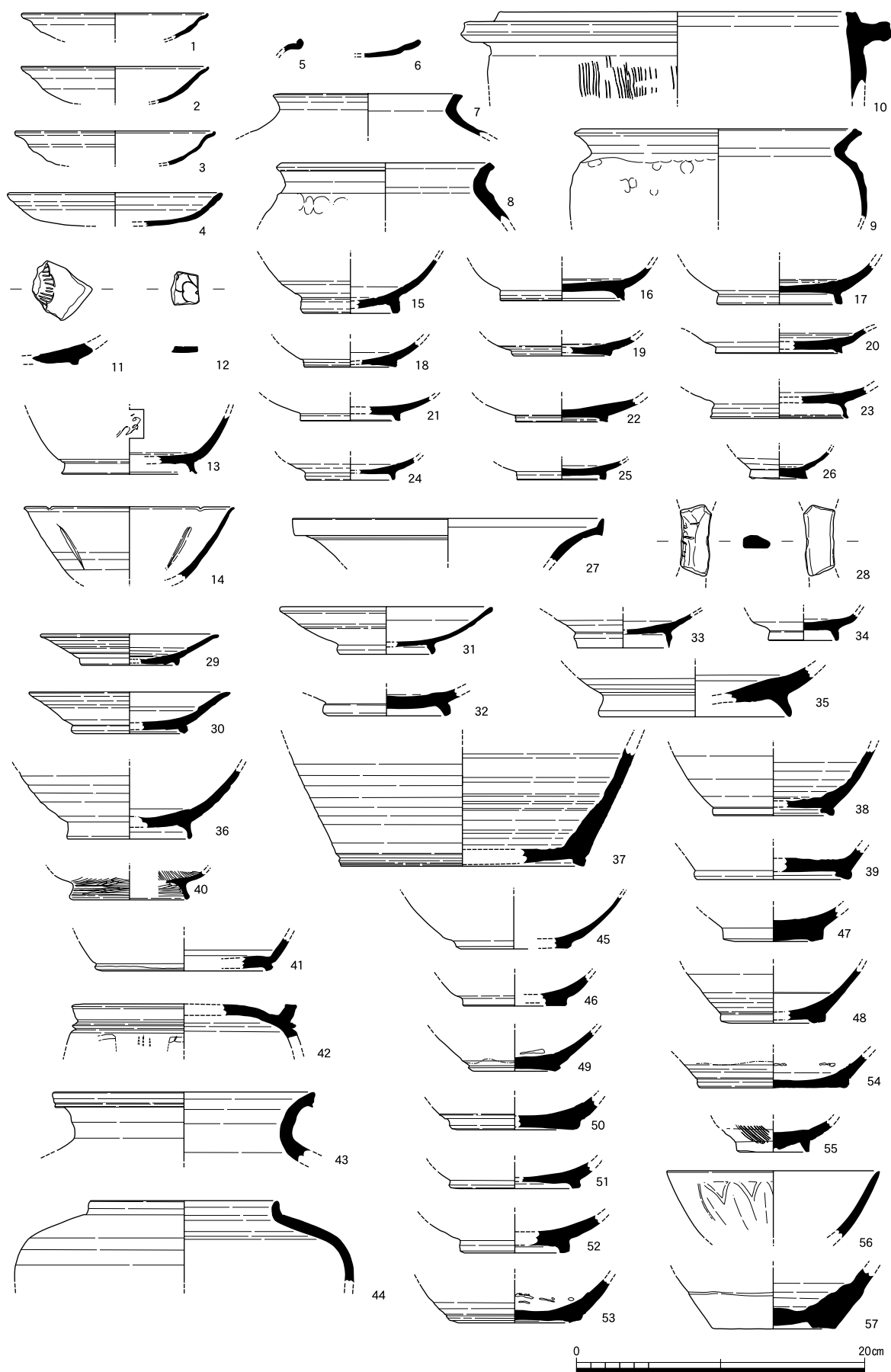


图7 土器实测图 (1 : 4)

14は溝507から出土した緑釉陶器椀である。口縁端部と体部外面に縦方向の篋押しによる輪花を配する。胎土は密で淡灰色である。釉は体部内面・外面に掛け、濃い緑色である。美濃系産で10世紀初め(Ⅲ期新)の可能性ある。

15は溝510より出土した全面施釉の緑釉陶器椀である。胎土は白灰色で、削り出し輪高台である。釉は淡い緑色。体部内面・外面にミガキの痕跡が残る。10世紀代の京都産の製品。

16は溝407から出土した全面施釉の緑釉陶器椀である。底部に糸切り痕が残る貼り付け輪高台で、高台端部が2段に分かれる。内面見込に浅い圏線が廻る。胎土は灰色で硬質。釉も濃い緑色である。10世紀代の近江産か。

17は溝507から出土した全面施釉の緑釉陶器椀である。貼り付け輪高台で、内面見込に沈線の圏線が廻る。胎土は灰白色で焼きの甘い須恵質。釉は淡い緑色である。東海系で9世紀後半(Ⅱ期中)である。

18は溝503から出土した全面施釉の緑釉陶器椀である。削り出し蛇の目高台で、胎土はやや硬質である。釉は淡い灰緑色である。9世紀代の幡枝産であろう。

19は溝402から出土した緑釉陶器皿である。胎土は須恵質で灰色。削り出し平底高台である。ミガキ内面外面とも残るが雑である。釉は薄く、内面に輪状の重ね焼きの痕跡が残る。大原野窯系で10世紀代。

20は溝505から出土した全面施釉の緑釉陶器段皿である。胎土は淡灰色。釉は淡い黄緑色である。貼り付け高台で底部に糸切りの痕跡が残る。高台先端が2段に分かれる。近江産で10世紀前半。

21は溝509から出土した全面施釉の緑釉陶器皿である。削り出し輪高台である。硬質で淡灰色である。10世紀初め(Ⅱ期新)の京都産に比定できる。

22は5区南トレンチの遺構検出中に出土した全面施釉の緑釉陶器皿で、21に類似する。胎土は硬質である。高台は削り出し輪高台である。釉は淡い緑色である。京都産で10世紀初頭(Ⅱ期新)に比定できる。

23は溝508出土の全面施釉の緑釉陶器皿である。貼り付け高台で端部が二段に分かれるが、明瞭ではない。胎土は灰色であるが密で、濃い釉が掛かる。内面に沈線による圏線が廻り、目跡が1箇所付着する。10世紀代の美濃系産の可能性ある。

24は溝102出土の緑釉陶器皿である。青灰色の須恵質である。削り出しの平底高台で、内面外面共にミガキがある。釉は茶褐色で高台底部は掛けない。大原野窯系で9世紀後半。

25は溝509から出土した緑釉陶器皿である。胎土は灰色である。削り出し輪高台で、高台内面に釉はない。釉はやや灰色の淡緑色である。内面外面ともミガキの痕跡が残る。10世紀前半の京都産の製品であろう。

26は溝607出土の小型緑釉陶器椀である。断面台形の糸切り平底高台である。胎土は須恵質

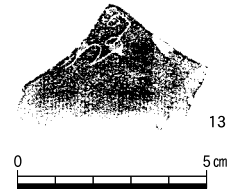


図8 緑釉陶器陰刻文拓影
(1:2)

で白灰色。ミガキの痕跡はない。釉は薄く高台底にも釉を掛けない。篠窯あるいは小塩窯産で10世紀前半代。

27は溝508出土の緑釉陶器広口瓶の口縁部である。胎土は密で須恵質である。釉は濃い緑色で、剥落が多いが、全面掛けている。ミガキの痕跡はなく、美濃系産の可能性はある。10世紀前半。

28は溝604から出土した瓶の取っ手である。内側の左側に大きな面取りを施している。胎土は密で橙がかかった乳白色で焼成は甘い。釉調は透明感のある淡黄緑色で、9世紀代の京都産であろう。

灰釉陶器 (29～39)

29は溝607から出土した灰釉陶器段皿である。口縁部の体部外面と内面に薄く刷毛で施釉する。貼り付け高台で糸切り痕が残る。口縁端部は外反する。胎土が猿投窯産や他の東海系灰釉陶器よりきめ細かく、ややクリーム色である。10世紀代の美濃産の可能性が高い。

30は溝102出土の灰釉段皿であるが、施釉した痕跡はない。高台内面に糸切り痕があり、貼り付け高台である。胎土は緻密で乳白色である。美濃系産か。10世紀代。

31は溝504から出土した灰釉陶器皿である。貼り付け高台で断面は内湾する。釉を内面底と高台内面を除いた部位に薄く刷毛で施釉する。口縁端部はやや丸い。高台内面糸切り跡が不明瞭に残る。美濃系産で10世紀初め(Ⅱ期新)に比定できる。

32は溝504から出土した猿投窯産灰釉陶器皿である。断面が台形であるが、内湾する。貼り付け高台で、内面底部には施釉しない。胎土は灰白色で、やや荒い。9世紀代。

33は5区南トレンチで遺構検出中に出土した。灰釉陶器皿である。残存部に施釉は見られない。胎土は緻密で乳白色である。底部糸切り痕が残る貼り付け高台で、高台断面は内湾している。美濃系産で10世紀代に比定できる。

34は溝407から出土した灰釉陶器椀である。貼り付け高台で底面に糸切り痕が残る。内面に厚く荒い釉が掛かる。9世紀後半の東海系の製品である。

35は溝404から出土した灰釉陶器大型鉢である。釉は外面高台まで、内面は口縁部だけで内面底には施釉しない。内面底に高台を重ね焼いた環円状の痕跡がある。高台は高く外反するが、先端を丸く収める。10世紀代の美濃系産か。

36は溝508から出土した。貼り付け高台の灰釉陶器椀である。施釉は刷毛塗りの可能性があり、外面は腰辺りまで、内面は立ち上がり部まで塗る。内面底部には施釉しない。高台断面が内湾する貼り付け高台である。内面底に高台を重ね焼いた環円状の痕跡がある。9世紀後半の美濃系産の可能性はある。

37は溝505から出土した灰釉陶器広口瓶である。轆轤成形で貼り付け高台。高台断面は台形であるが外側が高い。釉が高台付近まで垂れてきている。外面無釉部分も光沢がある。高台内面底に円状に釉と砂が付着した部分がある。美濃系産。10世紀。

38は溝509から出土した。猿投窯産灰釉陶器長頸瓶である。外面高台部まで釉が垂れる。貼り付け高台である。胎土は灰白色であるが、やや荒い。高台内面にも施釉している。9世紀代。

39は溝507上層から出土した。灰釉陶器長頸瓶の可能性はある。貼り付け高台であるが、底部に糸切り痕がなく回転による篋か匏の平坦面を作る。東海系窯産であると考えられるが、9世紀末から10世紀代の美濃産である可能性もある。

黒色土器 (40)

40は溝508から出土した黒色土器碗である。全面に炭素が吸着し、高台径8.4cmの大振りの碗で、やや外反している貼り付け高台の高さも高い。高台内外にも横方向の篋ミガキが見られ、高台底部にも横方向の篋ミガキを施している。10世紀半ばの黒色土器B(Ⅲ期古～中)に分類できる。

須恵器 (41～44)

41は溝508から出土した須恵器杯の底部である。貼り付け高台で、高台底部外面に篋による面取りがある。底部高台内面も含め外面に自然釉が付着する。9世紀半ば(Ⅱ期古)に比定できる。

42は溝506出土の推定口径15.6cmの須恵器円面硯である。径約10cmの陸部は円滑で、墨を擦った使用跡が明瞭に残る。脚部を欠いているが、篋で方形の窓を切った痕跡が2箇所ある。9世紀代の遺物であろう。

43は溝503出土の口径18.2cmの小振りの須恵器甕の口縁部である。器表は褐色化しており、焼締陶器に移行する段階の須恵器である。平安時代末期から中世初頭で産地不明。

44は溝505から出土した口径13.3cmの須恵器短頸壺である。回転ナデ調整。釉が肩部に蓋が被さる口縁部と頸部から肩部にかけての約1cmを除き円環状に付着している。9世紀代。

輸入陶磁器 (45～57)

45は溝501から出土した白磁碗である。胎土は精緻で白色。高台端面に面取りを施す。平高台か蛇の目高台かは欠損のため不明である。高台底と面取り部分を除き透明な釉が掛かる。器厚が薄く、また、重ね焼きの痕跡もない。9世紀代の邢州窯の製品であろう。

46は溝602から出土した白磁碗である。45とほぼ同じであるが、蛇の目高台である。45より器厚がある。45と同じ9世紀代の邢州窯の製品。

47は溝502から出土した厚手の白磁碗である。胎土は白色であるがやや荒い。高台は浅く削り出して蛇の目に作るが、浅い。外面の釉は高台まで掛からない。内面は全て掛かるが、目跡が3箇所ほど残る。畳付部は平坦で磨かれたためか円滑である。12世紀代の製品である。

48は溝502から出土した白磁碗である。胎土は白色で、高台の作りは47と同じである。しかし、内面見込に沈線が廻り、釉調はやや灰緑化している。釉は内面全面に掛かるが、体部外面の残存部にはない。目跡が2箇所残るが目立たない。12世紀代の製品である。

49は溝608出土の青磁碗である。胎土は青磁に比べ褐色化して淡いクリーム色を呈している。高台は削り平底であるが中心部に向かってやや凹む。高台端面に面取りを施す。釉は内面全面と外面高台削り出し部まで掛け、灰オリーブ色である。内面見込部に細長い貝殻と思われる目跡が環状に並ぶ。高台端部にも目を環状に配置して重ね焼きした火跡が褐色化して残る。産地は越州窯である。9世紀代。

50は溝102から出土した青磁碗である。49と同じ手法で作られているが、胎土が灰色で釉も

濃く暗いオリーブ色になっている。高台素地部は酸化炎によって褐色を呈し、重ね焼きによる目跡が灰色となって残る。火の受け方の違いによるものであろう。49と同様の越州窯の9世紀代の製品である。

51は溝601出土の輪高台の青磁椀である。豊付部を除き釉を高台内面まで掛けている。内面残存部に目跡はない。釉は49に比べ薄く掛かる。越州窯産で9世紀の製品であろう。

52は溝506出土の大振りの青磁椀である。輪高台の51と製作技法は同じであるが、器厚が厚く、釉の掛かりも多い。輪高台豊付けの部分は緩やかなアールを描き、円滑に磨いてある。使用痕の可能性もある。9世紀代。

53は溝508から出土した青磁椀である。製作技法は平高台の49・50とほとんど変わらないが、平高台を1.5cm程、鉋で輪状に削り取り輪高台風、もしくは蛇の目風に変化させている。また、49・50にあった中心部に向かってやや凹む高台内面中心部に釉を掛けており、高台の変化と無関係ではないように思われる。内面見込部に白色の細長い楕円形のざらついた目跡がやや斜めに規則的に密に配置され、釉の進入を防いでいるようにも思われる。また、各目跡が二股もしくは2列セットで並んでいることから、重ね焼きの際に二股のトチンか子安貝の貝殻を置いた可能性がある。高台外側端部の重ね焼きの火跡として残る褐色化した目跡には二股の痕跡はない。

54は溝509から出土した。胎土・釉とも荒れており、平高台である49・50と似ているが、平高台内の凹みがなく、高台外面だけを削り出している。高台底に種殻を敷いていた痕跡である小さな凹みが無数にある。外面腰部まで、内面全面釉が掛かる。内面見込に目跡が残るが、高台底に目跡の痕跡はない。同じ越州窯産でも1段ランクが下がる製品とされており、太宰府に出土例が多いとされている。越州窯の10世紀以降の製品であろう。

55は溝503から出土した櫛描文青磁である。同安系青磁とされているものである。高台を深く削り出すが高台内面は中心部が下がり逆三角形となる。外面・内面とも櫛描文を描く。胎土は灰白色で硬質である。内面見込部に沈線による圏線がある。釉は淡い青緑色で透明感がある。中世前期。

56は溝501出土の龍泉窯系椀である。篋で浮き彫りした蓮弁を体部外面に廻らす。茶褐色の釉調で胎土は灰白色である。中世前期に大量に輸入されたが、調査地周辺では出土例がなく珍しい。

57は溝501出土の褐釉壺であるが、釉薬が掛かった上半部を欠落している。荒い口クロで成形し胴部と蛇の目風の高台部を削り出している。削りは右方向に砂の移動痕跡があり回転方向が国産品と逆である。胎土はやや荒く灰白色で焼成も甘い。底部と胴部の立ち上がり部が厚く内面に焼き膨れの痕跡がある。12世紀から13世紀にかけての輸入品であろう。

(3) 瓦類 (図9)

瓦類は今回の調査で多く出土し比率的にも多いが、全て破片である。軒瓦は7点出土したが、2点は文様部が磨滅し、判別不可能なため5点(58～62)を掲載する。

58は溝408から出土した軒平瓦である。珠文が中心にないが、中心飾りが三葉で左右対称の

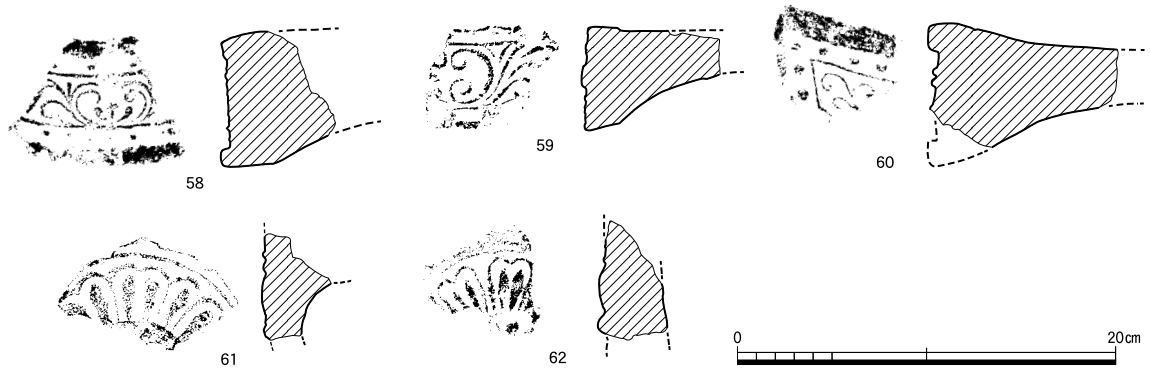


図9 軒瓦拓影・実測図 (1 : 4)

二重C形葺手が三葉を囲む。模様から平安時代前期に西賀茂角社東群窯で焼かれた造東大寺司系の瓦である。曲線顎で顎底部を篋で削る。胎土は精緻であるが、焼きは甘い。瓦当面は円滑である。

59は溝504から出土した軒平瓦である。中心飾りが対向C字で、58より新しいタイプである。斜め方横向に顎部粘土を撫で付けた曲線顎で顎底部を削る。削り幅は58より短い。凹面端部まで布目端が及んでいない。範跡は鋭く刻印されており、胎土は精緻で焼成も硬い。時代は平安時代前期後半と想定される。

60は溝407から出土した軒平瓦である。珠文が密に廻る。焼成は甘く、胎土は乳白色であるが、表面は黒色で炭素が吸着している。凹面は59と同じ作りである。顎底部を欠くが曲線顎で、断面がややラッパ状に開く。範を打つ時に範割れを防ぐため、瓦当部を布目を敷いた凸型台から意識的に出した痕跡であろう。平安時代中期。

61は溝505から出土した。複弁蓮華文の軒丸瓦であるが、間弁がない。焼成は良く硬質で、瓦59と類似する。裏面に丸瓦部と接着面が残存する。丸瓦部との接合部に粘土を付け足し撫で付けている。産地は不明であるが平安時代前期に想定できる。

62は溝405から出土した。61と同じく間弁のない複弁蓮華文であるが、模様が立体的で肉厚である。中心の珠文から放射状に蓮弁が派生する。60と焼成・胎土が類似する。表面も同じく炭素が吸着している。平安時代中期か。

(4) 石製品 (図10)

63は1区中央の地山直上から出土した、板状の石帯の歩留まり品である。片面に斜線から端部

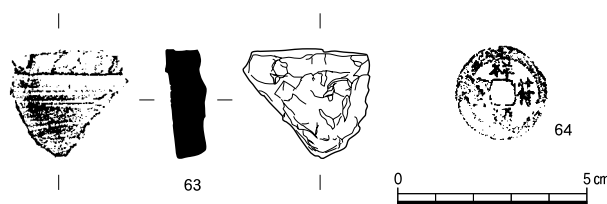


図10 石製品・銭貨拓影・実測図、(1 : 2)

部分で平行線に変化する直線の石切鋸の跡が明瞭に残る。石端0.7cmまで切り、そこから割れている。他面は全て欠いた跡である。裏面に石切鋸の痕跡がないことや、残存厚さから石帯生産の際に発生する石材端部の捨てられた部分である可能性が高い。色調はやや緑がかった透明感がある乳白色で、材質は玉髓である。調査区周辺では

石帯が比較的多く出土しており、調査区東隣の右京一条三坊十二町（調査3）でも半製品1点や石材4点が出土している。11世紀以降の石帯は1例も確認されていないので、平安時代前期から中期に「玉石帯工」によって生産された物であろう。

（5）銭貨（図10）

64は溝201から出土した北宋銭で、大中祥符二年（1009年）初鑄の祥符通寶である。今回の調査で出土した唯一の銭貨で、同じ溝で出土した中世初頭の輸入陶磁器と年代が近い。

参考文献

古代学協会・古代学研究所編『平安京提要』1994年 「平安京の遺物」収録の各項。

小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要 第3号』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1996年

平尾政幸「平安京の石製銚具とその生産」『研究紀要 第7号』（財）京都市埋蔵文化財研究所、2001年

5. ま と め

今回の調査によって、恵止利小路と中御門大路が耕地として浸食され道幅が狭くなり、現在に至る過程の一端を明らかにすることができた。また、平安京造営プラン推定位置で大路と小路の側溝を検出したことは、当時の造営技術の高さを証明するものである。

恵止利小路については、溝の切り合いと出土遺物から、調査区の西端で検出した西側溝である溝 509 が 10 世紀後半に埋まり、以降徐々に東側へ溝を付け替えることによって、中世には小路の中央付近まで道路が縮小していったものとする。巷所化した内側からは建物跡などを一切検出していないので、耕作地化していったものと結論できる。このことは平安時代中期に建物などの遺構が消滅する周辺の調査結果と矛盾しない。

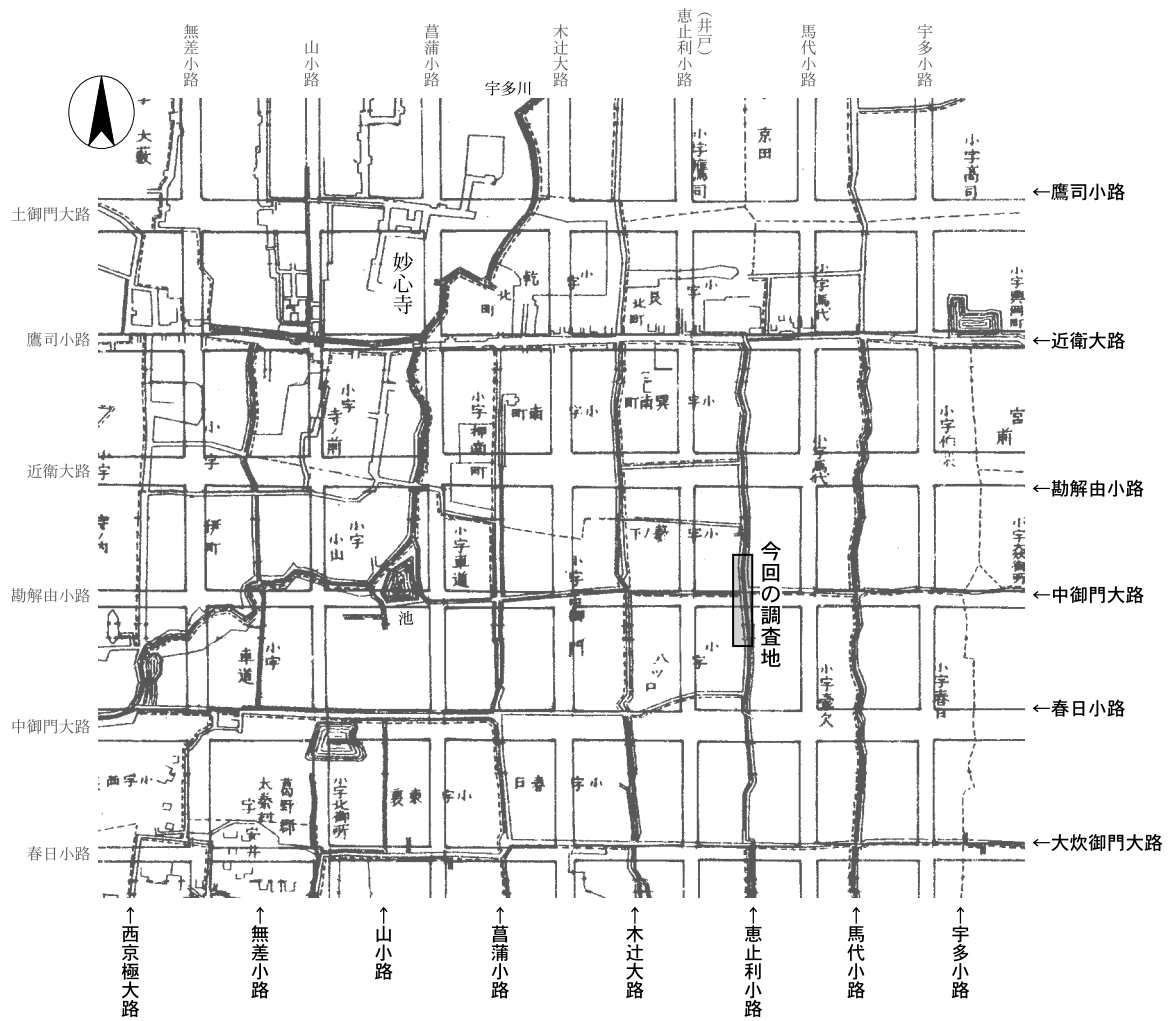
この溝を切って成立する溝 508 と溝 608 から 11 世紀代の土師器が出土した。この一連の溝は溝の形態から、4 区北トレンチで検出した 11 世紀代の遺物が出土した中御門大路南側溝（溝 408）に類似している。また、花園大学が調査（第 9 次調査『平安京右京二条三坊八町一花園大学構内調査報告Ⅶー』花園大学考古学研究室 2010 年）した 4 m 幅の中御門大路南側溝（SD01）の中に、新たに掘り込まれた 10 世紀末から 11 世紀初頭の溝（SD02）とも類似する。いずれも肩部は不明であるが底が窄まる形態は同じであり、『延喜式』『京程』にある溝推定位置から検出したことを考え併せると、11 世紀以降に廃絶した南側溝の可能性が高い。道路管理を所轄した「右京職」による道路規制がその頃まで存続した可能性があり興味深い。

調査区中央から東半の溝群は溝 408・508・608 廃絶以降に掘られた溝で、溝 203・403・503、溝 204・504 などからは微量の中世初頭の遺物が出土している。平安時代中期までの遺物しか出土しない溝 405・505・605、溝 406・506・606 はその間に掘られた溝ということとなる。11 世紀以降を起点に巷所化が急速に進展した可能性が高い。また、交差点中央部まで張り出した中御門大路の北側溝 2 条（溝 304・305）を検出したが、近世初頭の褐釉陶器が出土しており、埋没時代は近世まで降る可能性がある。

今回の調査では、花園大学の調査で検出した幅が広い下層の中御門大路南側溝（SD01）の延長を検出してない。また、恵止利小路西側溝を 4 区北トレンチでは 1 条も検出していない。このことから 3 区から 4 区北トレンチ間は耕作などの削平によって溝が消滅している可能性がある。

明治 27 年の平安京遷都千百年事業で編纂された『平安通志』（1894 年）付図「平安京舊址實測全圖」に中御門大路は「小字藪ノ下」と「小字八ツ口」の境界線上に東西道が描かれており、恵止利小路は両側を道に挟まれて南行する直線水路として明確に描かれている。そこに引かれた条坊復元線を今日の所見から検討すると、恵止利小路は約半町西に、中御門大路は約 1 町北にずれていると考えられる（図 11）。

このずれを修正すると衣笠山麓から派生する宇多川流域以南の恵止利小路と東の馬代小路、西の木辻大路・菖蒲小路・山小路等に、小道と宇多川から引かれた水路がセットになって明治時代まで存続していたことが判明する。宇多小路だけは道と水路の記載がないが、小字境として南北



『平安通志』付図「平安京舊址實測全圖」に加筆

※ ←↑ゴシックは修正街路

図 11 近隣条坊復元図

直線で記入されていることから、境に畦畔や小溝も伴っていた可能性がある。東西大路・小路跡も1町ずらせば、等間隔で小道や小字境が描かれており、近衛・中御門・大炊御門大路は小道としてほぼ貫通し、鷹司・勘解由・春日小路も小道や小字境として部分的に存続したことが判明する。これらの小道・小字境・水路などは平安京右京条坊の痕跡といえる。¹⁾

右京域では平安時代中後期以降、水路もしくは流路化した条坊路として、西大宮大路、西勒負小路、西堀川小路、野寺小路、道祖大路、宇多小路、木辻大路、山小路があり、これらは右京域の南北方向条坊路の約半数に及ぶことが今日までの調査で判明している。

惠止利小路も幅は不明ながら中央部に砂礫で埋まった溝 101・201・301・401・501・601、および溝 102・202・402・502・602 を検出している。前者の上層では近世の遺物が混入していたが、下層では平安時代の遺物に混じって鎌倉時代の遺物（龍泉窯系青磁碗・焼締陶器・輸入白磁など）が出土している。また、前者に掘り込まれた後者も宋銭や瓦器が最も新しい遺物である。調査地周辺は戦前まで御室川と宇多川の氾濫地帯であったことが記録等で明らかにされている。各調査区で検出した東端の溝は溝幅も広く深いことや、堆積層が主に洪水によってもたらされた

砂礫と考えられることから、宇多川から水を引いた灌漑用水路として掘られた可能性を指摘することができる。

『拾芥抄』「西京図」には、春日小路以南の恵止利小路を挟んだ西側に「前肥前守成季領」が、東側に「月輪寺領」が書き入れられている。前者は応徳三年（1086）文章博士となり筑前などの国司を歴任し漢詩人としても活躍した藤原成季のことであり、嘉承二年（1107）に出家している。彼によって最初に立券されたものが、伝領もしくは書き継がれて「西京図」に書き加えられた可能性が高い。後者は平安時代末から鎌倉時代初頭にかけて九条兼実の庇護を受けた、愛宕山に現存する月輪寺の領地のことである。これらの領地は少なくとも11世紀から13世紀初頭にかけて立券されたものであり、荘園化した可能性がある。今回明らかになった溝による小路の囲い込みによる巷所化や、灌漑用水路としての整備過程と時期的に軌を一にしており、調査地近辺の耕作地化による再開発とも連動しているのかもしれない。

なお、今回の調査では溝内から採取した土壌サンプルから平安時代の種子を検出しようとしたが、種子類は1点も発見できなかった。このことは周辺が耕作地化しなかったことを示すのではなく、木器などの有機物が分解してしまう酸化しやすい自然環境に置かれたためであると考えている。

調査においては花園大学の高橋克壽氏、（財）向日市埋蔵文化財センターの中塚良氏のご教示を得た。また、出土遺物に関しては平尾政幸氏のご教示を得た。

註

- 1) 東西道に沿って東西1町先に道を挟んで位置する小字中御門は、平安京条坊の名残を示しており、また、2町西の道を挟む小字車道も中御門大路が車道であったことを示唆している。今回、中御門大路との交差点で検出した路面306で検出した礫敷きと、轍跡と考える凹み跡は東西方向に車が移動していたことを示し、中御門大路が礫敷き路面である可能性が高くなった。

参考文献

- 小椋山一良・小松武彦・平田 泰・長戸満男『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1999年
- 京都市参事会編『平安通志』1895年
- 杉山信三「平安京右京の湿地について」『古代文化 第40巻第9号』1988年
- 山田邦和「左京と右京」『平安京提要』角川書店 1994年
- 山本雅和「平安京の路について」『立命館大学考古学論集Ⅰ』立命館大学 1997年
- 金田章裕「平安京街路の地割遺構」『歴史地理学と地籍図』ナカニシヤ出版 1999年
- 水戸部正男『公家新制の研究』創文社 1961年
- 馬田綾子「東寺領巷所」『日本史研究159』1975年
- 高橋敏子「京中巷所」『朝日百科 日本の歴史別冊 中世の館と都市』朝日新聞社 1994年
- 北村優季『平安京』吉川弘文館 1995年
- 中村修也『日本史リブレット10 平安京の暮らしと行政』山川出版社 2001年

古代学協会・古代学研究所編『平安時代史事典』角川書店 1994年

金田章裕「平安京左・右京図について」『平安京－京都 都市図と都市構造』京都大学学術出版会 2007年

『京都市水害誌』京都市役所 1935年

植村善博『京都の治水と昭和大水害』文理閣 2010年

版 图

報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんきょううきょういちじょうさんぼうじゅうさんちょう・にじょうさんぼうじゅうろくちょうあと							
書名	平安京右京一条三坊十三町・二条三坊十六町跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2011-4							
編著者名	東 洋一							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2012年3月15日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょうあと 平安京跡	きょうとうしきょうく 京都市右京区 はまぞのやぶのしたちょう 花園藪ノ下町、 はなぞのやつくちちょう 花園八ツ口町 ちない 地内	26100	1	35度 01分 06秒	135度 43分 32秒	2011年10月 7日～2011 年12月29日	387㎡	道路拡幅 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平安京跡	都城跡	平安時代 (9～10世紀)	路面、溝	土師器、黒色土器、須 恵器、緑釉陶器、灰釉 陶器、輸入陶磁器、瓦 類、石製品		恵止利小路西側溝 を検出した。 交差点で恵止利小 路を横断する中御 門大路南側溝を検 出した。		
		平安時代 (11世紀)	溝	土師器				
		平安時代 (12世紀)以降	溝、土坑	土師器、瓦器、須恵器、 焼締陶器、施釉陶器、 輸入陶磁器、瓦類、銭 貨				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2011-4

平安京右京一条三坊十三町・
二条三坊十六町跡

発行日 2012年3月15日

編集

発行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1
〒 602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地
〒 604-0093 TEL 075-256-0961